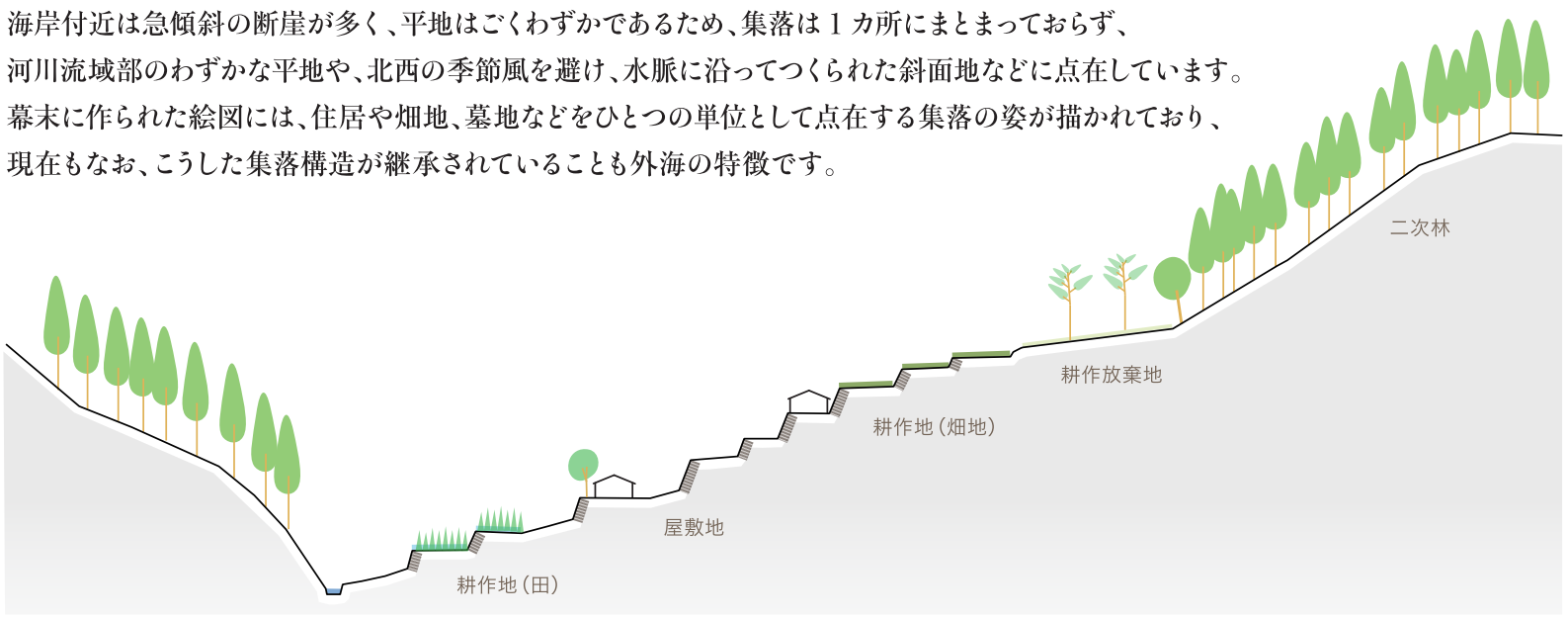
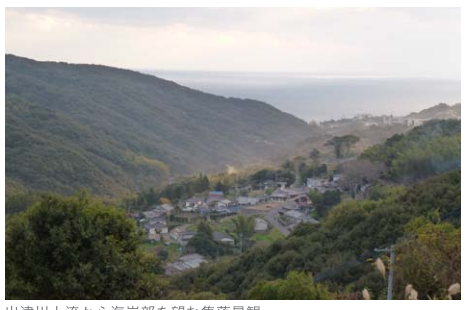
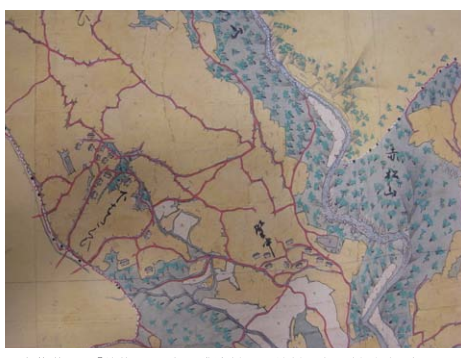
Cultural Landscape, Dry Stone Village of SOTOME ／Culture

急峻な地形がもたらす石積み文化

外海地域は角力灘に面した西彼杵半島の中心部に位置しており、
標高 400m 内外の起伏のある山地の間を流れる出津川によって作られた谷地形が発達しています。
海岸付近は急傾斜の断崖が多く、平地はごくわずかであるため、集落は 1 カ所にまとまっておらず、
河川流域部のわずかな平地や、北西の季節風を避け、水脈に沿ってつくられた斜面地などに点在しています。
幕末に作られた絵図には、住居や畑地、墓地などをひとつの単位として点在する集落の姿が描かれており、
現在もなお、こうした集落構造が継承されていることも外海の特徴です。




出津川上流から海岸部を望む集落景観

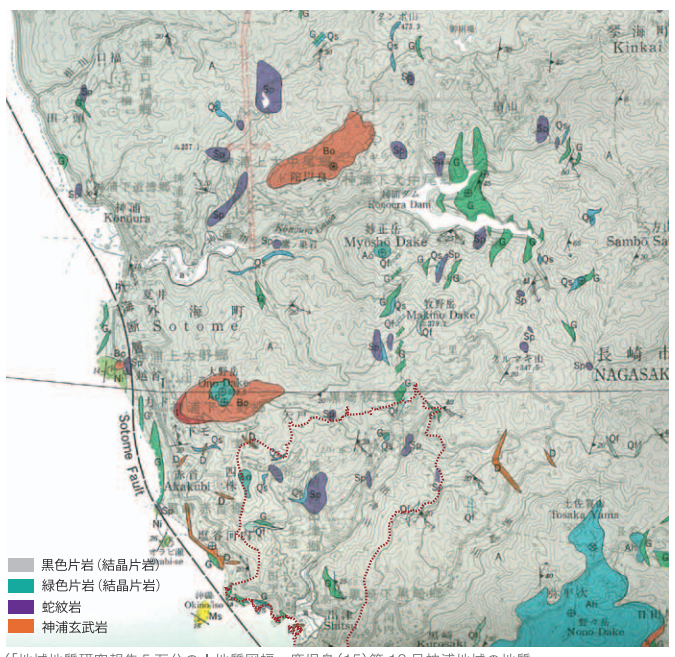

野中集落周辺「彼杵郡三重図 賤津村・黒崎村・永田村 文久2年 壬戌夏仕立（部分）（1862）長崎歴史文化博物館蔵

Cultural Landscape, Dry Stone Village of SOTOME ／Scenery

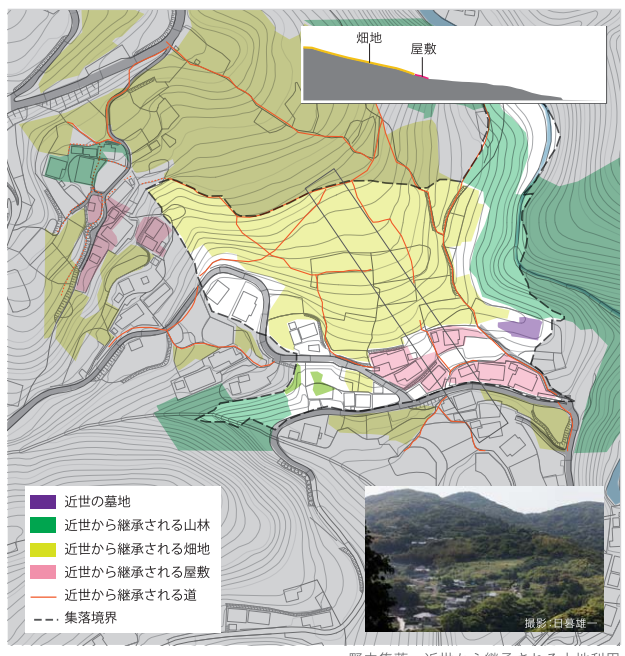
平らで加工しやすい結晶片岩がつくりだす特有の石積み風景

外海地域の地質は、結晶片岩という変成岩の一種で構成されています。
この石は斜面を開墾した際に数多く出土し、やわらかく平らで加工しやすい性質を持つことから、急峻な地形で暮らしていくための田畑や宅地の石垣、
水路や護岸の石積みのほか、住まいや墓石など、生活に密着する多種多様な石積みが地域の人々によって築かれてきました。

撮影：日暮雄一



（「地域地質研究報告 5 万分の 1 地質図幅　鹿児島（15）第 16 号神浦地域の地質」
地質研究所産総研承認番号第 60635130-A-20130325-001号）



野中集落　近世から継承される土地利用

Cultural Landscape, Dry Stone Village of SOTOME ／ History

石積みに刻まれた外海の暮らしと時間。

集落の至る所で見られる石積みの特徴は、歴史や生活様式の変化とともに、「形成期」、「発展期」、「大成期」、「復活期」の大きく 4 つの時代に分類されます。
生活を営むために必要な石積みは、特定の石工職人の手によってのみ築かれるものではなく、ここに住み、暮らしてきた外海の人々の手によって築かれてきたものです。

●外海石積文化の変遷

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期
	在地石積文化の形成期	外海独自の石積文化の発展	民衆石積文化の大成期	石積文化の衰退と復活期
特徴	在地の民衆による石積技術が完成される（西彼杵半島一帯に共通する石積文化）	ド・ロ神父による独自の石積技術の展開が見られる（外海固有の石積文化形成期）	新たな産業による地域の活性化を背景とした在来技術の進展（一部にド・ロ神父時代の技術の名残）	石積遺構・石積景観の価値が再認識されはじめる時期
時代	江戸	明治 / 大正	昭和	平成
石積文化の変遷	●環東シナ海地域の石積文化の影響 ●サツマイモ栽培開始、本格的な農地の開墾 ■宝暦・文久各種絵図に石積が描かれる	●ド・ロ神父による西洋石積文化との融合 相互に影響 ●在地の石積文化を主とする流れ ●ド・ロ神父独自の石積技術の展開 ■風景画・古写真に残された石積景観	●農地開墾のピーク ●池島炭鉱の開坑 ●第 2 期の影響を受けた新たな民衆石積文化展開 ●ド・ロ神父独自の石積技術は本格的には根付かない	●農業の衰退（担手の流出） ●新たに石積が築かれることが少なくなる ●石積遺構の文化財指定 ●農地の活用に伴う石積景観価値の再認識 石積文化の価値の転換
構造形式別石積文化の変遷	石垣 【階段状の田畑や宅地】 ●高平の屋敷石垣 ●三五ノ谷の水田石垣 特徴：算木崩しの隅角部と緩やかな反りを持つ石垣技術	●野道共同墓地の石垣 特徴：隅角の大きな反り	●牧野の曲面石垣 特徴：曲面と大きな反り	●出津小学校の石垣 特徴：近年（昭和期）に築かれた最後の長大な石積
	石築地 【海の波や風を防ぐ】 ●出津浜の石築地 特徴：海岸で採取される玉石を落とし積に積んだ石築地		●出津浜の防風壁 特徴：海岸で採取される玉石を矢羽根積に積んだ石築地	
	石塀 【宅地の境界を示す】	●旧出津救助院のド・ロ塀 特徴：石灰を混ぜた目地材により石塀を構築	●C家の石塀 特徴：海岸で採取される玉石を積んだ石塀	
	石壁 【家や倉庫の壁】 ●J家のネリベイ建物 ●H家のネリベイ建物 特徴：四周に石壁を築く、閉鎖的なネリベイ建物が主流	●大平作業場跡 ●橋口家住宅 特徴：ド・ロ神父主導により築造された西洋的石壁技術	●O家のネリベイ建物 ●P家のネリベイ建物 特徴：石壁が主要構造部から下屋支えとして多用されるようになる。	●L家のネリベイ建物 特徴：主屋からネリベイが消失し、付属屋に温存される傾向となる。

●ネリベイ建物の変遷

時代	江戸～明治中期	明治中期～大正		大正～昭和期
屋根葺材	草葺き屋根	瓦が普及し始める		瓦葺きが一般化
構造と変遷	四方壁	下屋が発生	建物規模が拡大	木造の軸組が普及
ネリベイ建物	四方壁の小型の主屋 【J 家のネリベイ建物】	下屋をもつ木造建物。ネリベイは建物の一部に使われる。 当初のネリベイ 【H 家のネリベイ建物】	橋口家住宅 倉庫（明治36 年）ド・ロ壁を使用した 2 階建てのネリベイ建物。 【橋口家住宅】	下屋を持つ木造建築が中心。衝立状のネリベイを新たに設置。 【P 家のネリベイ建物】

マルク・マリー・ド・ロ神父とは >>　フランス人宣教師マルク・マリー・ド・ロ神父は 1879 年に外海地域の主任司祭として赴任。ド・ロ神父は宣教のみならず、外海の地で生きるための知恵を授けるため、産業・社会福祉・土木・建築・医療・農業・教育文化に奉仕しました。

Cultural Landscape, Dry Stone Village of SOTOME ／ Technique

江戸時代から培われた高い石積み技術。伝統技術と西洋技術の融合。

石積みは、構造的に「石垣」、「石築地」、「石塀」、「石壁」の 4 つに分類されます。外海地域ではこれら 4 つの構造物のすべてを同じ手法で築くという特有の技術が発達しました。
結晶片岩に赤土と藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁である「ネリベイ」のほか、明治期にはド・ロ神父によって、藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの石垣である「ド・ロ壁」が導入され、現在もこうした石積み構造物を数多く見ることができます。